

菩薩の腕輪

山本悦夫

毎年、夏の始めに東京で「アジアのお祭」がアジア婦人友好会の主催で開催される。この日は、名誉会長に常陸宮妃殿下をお迎えし、アジア十数カ国の大使夫人を初め二千人もの婦人がホテル・ニューオータニの大広間を埋めつくし華やかな楽しい会となる。このお祭の催し物のファッションショーをインドとインドネシアの在日婦人会から頼まれて数年間指導してきた。

そのようなある日、大使公邸の広い応接間でファッションショーのリハーサルの後、インドネシア各地の花嫁衣装を見せるショーの練習に立ち会ったことがあった。その時、一人の婦人の腕に美しく金色に輝く腕輪の意匠が鳥形のガルダであることに気付いた。普通、からだを飾る装飾品は衣服を着けていない部分が多ければ多いほどその部分に合わせた多くの種類の物で飾り立てていくようである。装身具は、裸の風俗文化の産物であって、完成した立派な被服でからだを覆うようになった現代においてはその分だけ装身具が貧弱になったと言ってよい。簡単な布を纏った仏像（悟りに達した如来は別として）は露出した部分が多いのでそれだけ多くの装身具を身に着けている。

初めてインドのマトゥラを訪れた時、博物館でボディサッタ（菩薩）の腕にガルダの腕輪を見つけた。人物の写真を真横から撮る人は滅多にないだろうが、仏像もそうであって真横の写真がないのでそれまで気付かなかった。この発見は、私を興奮させた。その場で館員を呼んで調べた結果、三体のボディサッタと一体のヤクシの石像の腕にガルダが彫ってあるのを見たのだった。

マトゥラは、今ではパキスタンに属しているガンダーラに対し仏像発祥の本家争いをしている土地だが、西欧人好みのガンダーラが遥かに人気が高く、そのためか観光客はほんの近くのタジマハールまでは押し掛けているのに、ここは忘れられたかのようにひっそりと落ち着いた佇まいをしている。ヤムナ川に沿って北に隣接する街がクリシュナ信仰の中心のヴリングーヴァンで、ここもいつも世界中から訪れるヒンズー教徒や新興宗教の信者で騒めいている。

ヒンズー教の神話では、仏陀はクリシュナと同じくヴィシュヌ神の化身とされている。ヴィシュヌ神はヒンズー教の重要な神の一つで、天駆ける時に乗るその「乗り物」が即ち鳥王ガルダである。マトゥラのボディサッタ（菩薩）は生前の仏陀の王子の姿を現して

いて、贅沢に装飾品で身を飾っているが、日本に到来した時には既に菩薩と言う漢訳の名前に変わり、瓔珞と呼ばれるベンダント、胸飾と呼ばれるネックレス、腕釧と呼ばれるブレスレット、臂釧と呼ばれるアームレットなどで女と見紛うほど華麗、豪華着飾っていたが、どこで取り外したのか、その腕からガルダは消えていた。そしてそのガルダは迦楼羅とか竜を食べる金翅鳥とか言う名で仏（如来）や菩薩より一段低い地位の神ではあるが、仏法を守護する天となってヴィシュヌ神とは離れ離れに日本に渡ってきた。奈良の興福寺に参られた方の中には、八部衆の一人として唐の武将の甲冑に凛々しく身を固めた迦楼羅の姿があるのに気付かれた方もあるだろう。

インドネシア大使公邸で見たのは、バリ島の花嫁姿であったが、それは確実にガルダの臂釧をつけた菩薩形であった。インドの影響を受けたインドネシアやその他多くの東南アジアの国々では、ガルダは王の権力の淵源の象徴となっている。それを裏付ける事例には事欠かないが、古いものとしてはインドネシアの神話でヴィシュヌ神の化身とされるアイルランガ王（この王は十一世紀に実在した）が、国難を救うため神鳥ガルダに打ち跨って天から駆け下りてくる姿を表した石像が東ジャワで発見されている。

マトウラの菩薩像はその腕輪に象徴されたガルダによって、仏陀もまたヒンズーの神であるヴィシュヌ神の化身そのものに外ならないことを強く主張し、バリ島の花嫁姿は静かにそれを受け入れたものではないだろうか。（終）